
滅 怪 伝

R y u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅 怪 伝

【Nコード】

N2749Z

【作者名】

R Y U

【あらすじ】

これは霊にまつわる能力をもつもの達の不思議な不思議な物語である……

第巻話 行くぜ！霊怪探偵メツカイ！！（前書き）

この小説は息抜きのために書き始めたものです。

他の小説のアイデアが浮かばない時などに進めて行くのでかなり不
定期になると思います。

それでもよければ読んでください！

第巻話 行くぜ！霊怪探偵メツカイ！！

日本には古来より妖怪、悪霊と言った類と戦い続けるもの達がいた。霊滅術師・・・、陰陽師・・・、それ以外にもまだまだいる。

そして時は現代・・・

20XX年、ここに一人の青年がいた・・・

「メツカイ〜〜！、待たんかこの馬鹿もんがあ〜！！」

「誰が待てと言われて待つか、ジジイ！、今日も元気に外を満喫してくるぜ！」

「逃すか！」

そう言うと老人は刀をメツカイに向かって投げつける。

3

「ぎゃあっ！？、何すんだジジイ！、可愛い孫を殺す気が！？」

「ん？、可愛い孫なんて何処におる？」

「くおのジジイ〜〜・・・」

「いいからさっさとついてこい、修行の続きじゃ。」

「ちっ、わあっただよ・・・」

メツカイは渋々老人について行く。

この老人の名は霊崎カイクウ、メツカイの祖父であり一流の霊滅術師である。

そして彼はメツカイ、一応この物語の主人公である。

「メツカイ、まずはこの廊下を雑巾掛けしろ、往復二十周じゃ。」
「へいへい。」

「返事は一回じゃ、アホたれ。」

「……(怒)」

メツカイは黙々と雑巾を掛け、二十周を終えた。

「……はあ、はあ、終わったぞじいさん。」

「よし、じゃあ次は水汲み、それから薪割り、わしの部屋掃除じゃ。」

「

「とりあえず最後おかしいだろ！」

「つべこべ言わんでさっさとやれ！、でないと飯抜きじゃ。」

「クソジジイ……」

「……約一時間……」

「お、終わったぞ、じいさん……」

「そうか、飯はできとるからさっさと食べ。」

「よっしゃ！いただきまーす！」

メツカイが食べているのは精進料理と言い、いわゆる肉類など生臭物が入ってない料理である。

「……ふう、ごちそうさま！」

「お前、飯の事に関してはマジメじゃの……」

「そりゃあ自然に対する感謝ってもんはちゃんとしねえとな。」

「ほう、……まあそれはそれとして、今度は昼まで修行じゃ、朝と同じ事を二倍やつてもらっぞ。」

「うえ……めんどくせえ。」

「お前がいつもサボるから慣れんのじゃろつが。」

「わかったよ、やればいいんだろ。」

そしてメツカイの修行は昼を挟み夜まで続いた。

「・・・くそお、ダリい、畜生・・・」

「まあ、今日はこれぐらいにしといてやるう。」

カイクウが振り向いた時だった。

ガツガツガツ！

「う、うわあ!?!」

いきなり数本の短刀がメツカイめがけて飛んできたが、カイクウがそれを全て撃ち落とす。

「ひよひよひよひよひよ・・・、良い霊力を持っているな、小僧。」

「な、なんだてめえ!?!」

「み、源義経!?!」

「じ、じいさん、源義経ってあの歴史上有名なあの・・・?」

「ああ、そうじゃ・・・!」

「その義経がオレ達になんの用だよ!?!」

「ひよひよ・・・、貴様のその若々しい霊力、我等の完全復活のため、役立ててもらおうぞ。」

「わしがおる限りメツカイには指一本触れさせんぞ!」

「ふん、老いぼれが・・・、引っ込んでいれば良いもの!」

義経はカイクウに襲いかかる!

キーン!

「くっ！」

「ほう、我太刀を受け止めるとは、ただの老いぼれではないようだな。」

「・・・何故お前がこの時代におる？、お前達は昔復活した際に平影清に黄泉へと送り返されたはず・・・」

「ひよひよひよ・・・、残念だがつい最近復活したこともある、その時も影清に邪魔されたがな！！」

キーン！

「ぬう、はあっ！」

ガキーンッ！

「ひよおっ！」

カイクウと義経の激しいぶつかり合いが火花を散らす。
メツカイは今の状況に恐怖を抱いていた。

「な、なんなんだよ、これ！？やべえよ、このままじゃ・・・」

カイクウと義経のぶつかり合いはさらに熱くなる。

「ぬう・・・、この老いぼれ、中々できる、やはり不完全な状態では・・・、ん？」

義経の目にメツカイの姿が写る。

「そうか、やつがいたな・・・」

「よそ見をしとる場合か!?!」

「ふっ、老いぼれ、我にばかり気をとられ過ぎだ、ひよおおおー
ー!?!」

「しまった、メツカイ!」

義経の放った短刀がメツカイめがけて飛んでいく!

「う、うわあああ!?!」

ザシュツ!

「……………?」

「無事かメツカイ?」

「じいさ…………」

『!?!』

メツカイの前にいたのは体を貫かれたカイクウだった。

「おい…………、嘘だろ?」

「…………よく聞け、メツカイ、今のお前ではやつには勝てん、こ
こは一端引いて安駄婆と言つ三途の川の渡し人をあたるんじゃ…………
。」

「な、何言ってるんだよ、全くもって意味がわからねえ!」

「いまは分からんでもいい……、いつか分かる……ぐふつつ！」

「じいさん!？」

「ひよひよひよ!馬鹿なやつめ、そんな小僧をかばうとは、愚か
しか言い様が無い!」

「……いま何つつた?」

「愚かと言ったのだよ!そのジジイは!!」

「黙れ。」

「ひよ?」

「その鬱陶しい口を閉じやがれゲス野郎!!」

「!?!、なんだこの小僧、突然霊力が上がった!？」

「うおおおお!!」

「くっ、ガキがあああ!!」

短刀を放つ義経、だが短刀は全てメツカイの振り回す刀によって弾かれる。

「ひよっ!?!」

「ブツた斬る!」

ザンッ!

「ぐあああつ!、くっ、くそ、まさか我がこんな小僧に!、ここは
ひとまず引かねば!」

その言葉の後、義経は突如姿を消した。

「はあはあ、じいさん!」

カイクウに急いで駆け寄るメツカイ、だが・・・

「・・・・・・・・」

「・・・嘘だろ?、オレはこれからどうすればいいんだよ?」

悲しみに浸るメツカイ、しかしその前に突如謎の男達が表れる。

「・・・・・・・・」

「な、なんだお前ら!??」

さらに男達はカイクウの死体を持ち去ろうとする。

「おい、待ちやがれ、じいさんをどうする気だ!??」

「これはこちらで処分させてもらう、何分秘密の多い体でね。」

「!、・・・てめえら鞍馬家の奴等だな?」

「ええ、そうです。」

「・・・相変わらず胸くそ悪い連中だ。」

「では急いでるのでね、去らばだ。」

シュンツ!

男達は風のように去って言った。

「オレはどうすれば・・・・・・・・」

メツカイはふと思い出す、カイクウが死に際に言ったメッセージを。

安駄婆と言う三途の川の渡し人を訪ねると・・・

「・・・そうだな、立ち止まっても仕方ねえ、まずはその安駄婆
つてやつに会いに行くぜ！」

と、メツカイが意気込んだ時だった。

「その必要は無いぜ！」

「何？、誰だ！？」

メツカイが振り向くとそこにいたのはアニメなどにいそうな白くて
丸々したオバケだった。

特徴と言えば生意気そうな顔と長いシルクハットだった。

「お前のじいさんのメッセージは死に際に安駄婆に届いた！、だか
らこの俺がお前に協力してやるぜ！」

「・・・お前が？」

「おうつ！」

「はあ・・・」

メツカイは深いため息をついた。

「テメエなんだその態度！オレがやくたたずとも思ってたのか！
？」

「いや、だって正直お前弱そうだし。」

「バカ野郎！確かに俺は戦えないが役に立つんだよ！」

「もういいから帰れよオバケ。」

「テメエこのまま帰ったら俺が安駄婆に殺されちまうだろーが！！」

「ちっ、てめえもう死んでるだろ・・・、わかったよ、じゃあと
りあえず山を降りよう」

「待てメツカイ、アテはあんのか!？」

「え、ああ・・・特に無えな。」

「だったら俺に考えがある。」

「何だよ？」

「幽霊、妖怪関係の仕事を解決する仕事さ!」

「はあ？」

「と言う訳で霊怪探偵ってのはどうだ!」

「まあ・・・いいんじゃないのか？」

「そうと決まれば下山だ!、行くぞメツカイ!」

「ちよつと待て!」

「何だ？」

メツカイが幽霊を呼び止める。

「お前名前何だ？」

「おっと、そうだったぜ、俺の名はジョージ・マルティンヴィッチ・

カーネル・ザ・ワンダフル・ジョナサン三世だ!」

「長!?!、もうジョジョでいいだろ!」

「・・・まあ、そうだな、素人には呼びづらいだろうな。」

「どつでもいいから早く下山しようぜ。」

ジョジョを置いて歩き出すメツカイ。

「ま、待て!俺を置いてくんじゃねえ!」

こうしてメツカイとジョジョ、新しいコンビが誕生した。

第巻話 行くぜ！霊怪探偵メツカイ！！（後書き）

今回はシリアスになりましたが基本は笑いも有りでございます。と思ひます。

では次回もよろしくお願ひします！

第貳話 寢床確保は大事だぜ！

義経との戦いから一日が経った。

メツカイはアテもなく歩いてた。

「・・・これからどうするか。」

「なあメツカイ、お前学生じゃねえのか？、学校はいいのか？」

「・・・それもそうだな、サボろうかなって思ってたけどやる事も無いからな・・・学校に顔出すか。」

メツカイはとりあえず公園のトイレに入り、制服に着替える。

「・・・さて、行くか。」

メツカイは学校へと歩き出す。

- 零天高校 -

「さて、どうすっかな・・・」

教室の前で立ち止まるメツカイ。

そんなメツカイにジヨジヨが声を掛ける。

「フツーに入ればいいだろ。」

「ちつとばかりサボってたから気まずいんだよ！」

「いいから入りやがれ！」

「うわ!？」

ガラガラ！ドントッ！

ジヨジヨは教室の扉をあけメツカイを突き飛ばした！

ドサッ！

教室の入口で倒れ込むメツカイ。

そしてクラスの人達の反応は・・・

「・・・・・・・・」

「・・・あれ？」

「別にお前の事なんてどうでもいいみたいだな。」

「それはそれで傷つく・・・」

メツカイは少し落ち込んだ。

すると一人の女子がメツカイに声をかけてきた。

「おはようございます、メツカイさん。」

「・・・ん？、ああ、おはよう桃子。」

「メツカイ、何だよこの可愛子ちゃんは!？」

「あら？、そちらの方は・・・？」

桃子の視線はメツカイからジヨジヨへと移る。

「な、お前俺の事が見えるのか!？」

自分の事が見える桃子にジヨジヨは驚く。

「桃子は靈感が強くてな、何でも小学生の時は不思議な体験をした

らしい、それで中学生の頃にこつちに引越してきて、何でも霊関係の事で困ってる人や霊を助けたくて霊術師の修行をしてるんだとよ。」

「はい、少しでも困ってる人や霊達を助けたいと思って・・・」

「へえ、メツカイと違って偉いんだな！」

「オイ、どういう意味だ！」

「・・・ところでメツカイさん、いつもより元気が無いようですが何かあったんですか？」

「え、オレ元気無いように見えるのか・・・？」

「はい、すごく。」

「鋭い子だねえ。」

「・・・まあ、桃子になら話してもいいか、実は・・・」

メツカイはいままでの事を桃子に全て話した。

「・・・そんな事が。」

「・・・ああ。」

二人の雰囲気は暗くなっていた。だが、その時だった。

ガラッ！

「オイ、メツカイはいるか!!！」

一人の男が教室に入ってきた。

「めんどくさい奴が来たぜ・・・」

「どこだあ、メツカイ！」

「怪堂さん、あそこにいますぜ！」

「メツカイ！……ってゆ、ゆ、幽霊！？」

「どうしたんすか、怪堂さん！？」

怪堂と呼ばれた男はジョジョにビビリ尻餅をつく。

「怪堂、お前ジョジョが見えるのか？」

「じ、ジョジョってなんだ！？」

「怪堂さん、また何か見えたんすか！？」

「メツカイの横にマシユマロみたいのが！」

「マシユマロとは失礼な！」

「し、喋ったあ！？」

「オレが喋ったらいけねえのか！？」

「そうですよ琢磨さん、ジョジョさんはこんなに可愛いのに。」

「いや桃子、可愛いのは関係ないぞ。」

「も、桃子さん！？、まさか桃子さんも見えるんですか！？」

「はい。」

「……オバケ見えるの俺とメツカイだけじゃなかったのか。」

「ああっ！胸くそわりい！、オレはもう帰るぜ、じゃあな桃子、琢

磨！」

メツカイはいきなりそう言うと教室から出て行った。

「……どうしたんだ、メツカイの奴？」

「琢磨さん実は……」

「なんですか、桃子さん？」

桃子は怪堂に今までの事を話始めた。

その頃メツカイは……

「はあ、あの不細工の面みたら気分悪くなって来たぜ。」

そう言いながらメツカイはタバコを取り出す。

「あつ、メツカイいけないんだー！、未成年なのぬいー！」

「うるせーマシユマロ！」

「くらー！」

ゴンツッ！

メツカイは後ろから誰かに殴られた。

「痛え・・・！」

「たまに來たと思っただらすぐに下校か？、しかも校門を出たとたんにタバコとはな。」

「うるせえ、磯島！」

「先生をつけんか！」

ゴンツッ！

「痛え！」

「ちよつと職員室までこい、茶ぐらい出すぞ、・・・ん？」

磯島先生が振り向くとそこにはメツカイの人形が代わりに捕まっていた。

「さらば！」

「忍者か貴様は！」

メツカイは急いで学校を後にする。

「メツカイ、明日も来いよ！」
「ヒマだったらな！」

そしてメツカイはしばらく歩き続けた。

「メツカイ、これからどうすんだ？」

「とりあえず寢床を確保するぜ！」

「寢床？」

「ああ、なるべく金のかからない場所をな！」

その言葉を聞いた人が突然メツカイに声を掛ける。

「君、お金のかからない寢床を探してるのかい？」

「ん、ああ。」

「ちよつといわくつきの場所なんだけどいいかい？」

「いわくつき？、受けてたつぜ！、オレはこれでも霊能力者だぜ！」

「そうか、じゃあ安心だね、ついてきて。」

メツカイは男性につれられて歩く。

「ついたよ。」

「・・・こりゃまたいかにもって感じだな。」

「そう言えば自己紹介がまだだったね、僕は城ヶ崎、城ヶ崎ケンジだ、この花咲荘の管理人だ。」

「オレは霊崎メツカイ、オレに任せときな！」

メツカイは自分の名を名乗ると花咲荘へ走り出す！

「・・・彼のお手並み拝見といこうか。」

- 花咲荘内部 -

「オイ！幽霊出てきやがれ！」
「出て来いって言って出て来る幽霊は花子ぐらいたぜ。」
「……うるせえ人間だ、ぶつ殺されたいのか！」
「！？、どこだ！」

謎の声に警戒するメツカイ。

「そう慌てるな、まずはこいつらの相手をしてもらおうか。」
「きゅー！」
「な、なんだ、こいつら！」
「ク ボーみたいだな。」
「んな事言ってる場合か！」
「きゅー！」

ク ボーみたいなもののけ達はメツカイに一斉に襲いかかる。

「うおおおおおー！！！」

数時間後……

「きゅー……」
「はあはあはあ……くそ！、てこずらせやがって！」
「全くだぜ！」
「……お前殴っていいか？」
「おっと、安心するのはまだ早いぞ。」
「ギューッ！」

今度は先程のもののが凶暴化したような奴等が襲って来た。

「ぎゃあああああ！！ク ッターだあああ！！！」

もののけ達がメツカイとジヨジヨに噛みつくろうとした瞬間だった。

ドンドンドンッ……！

「ギユ!?」

ザンッ!

「ギユギユ!?」

間一髪でももののけ達は炭の様になって消えた。

「……あれ?」

「俺達助かったのか……?」

「二人とも大丈夫ですか?」

二人が顔を上げるとそこにいたのは桃子だった。

「桃子、お前どうしてここに、って言うか何だよその武器は!?!?」
「メツカイさん達の霊力をたどって来ました、それとこれは銃刀ガンブレードです。」

「そうじゃなくてなんでそんな物騒なモン持つてるのかだよ!」

「言いませんでしたか、私は霊術師であると同時に霊「滅」術師でもあるんですよ。」

「あははは……、霊術師って事しか聞いて無いよ……」

「桃子、こんなタワシみたいな奴等さっさと片付けちまえ。」

メツカイと桃子が話していると喋る黒猫が話を遮り桃子にそう言った。

「そう急かさなくてもちゃんとやりますわ、天の邪鬼さん。」

そう言うと桃子は一瞬でクッター達を尻ぎ払う。

「ギュー……」

「さあ、あなたの子分達は全員倒しました、早く出てきたらどうですか？」

「勇敢なお嬢さんだ……はーはッはッは、はーはッはッは……降参です！」

……

「へ？」

「どういう……事ですか？」

「桃子、メツカイ、どうやら俺達は一杯食わされたみたいだぜ、あの外にいた男に。」

「な、なにい!？」

パチパチパチ……

すると拍手の音と共に外にいたはずの城ヶ崎が現れた。

「見事だよ、メツカイ君、桃子さん。」

「城ヶ崎さん!？」

「試させてもらったんだ、安駄婆さんに頼まれてね。」

「安駄婆だと!？」

安駄婆の名前に強く反応する天の邪鬼。

「どうしたんだ、黒猫？」

「安駄婆は俺を再び猫の体なんぞに入れやがった張本人さ！」

「それで桃子さんの手伝いをするよう頼まれて「快く」引き受けたんだよね、天の邪鬼。」

「・・・ケツ！」

「本当は試すのはメツカイ君だけのつもりだったんだが、君達まで来るとはね・・・」

「もしかして、まずかったでしょうか・・・？」

「いや、むしろよかったよ、安駄婆さんの言っていた通り高い実力を持っている事がわかった。」

「で、メツカイはどうなんだよ。」

桃子達と話していた城ヶ崎にジヨジヨはそう聞く。

「メツカイ君はいまはまだ実力不足だが潜在能力は高い、問題なく霊怪探偵をできると思うよ。」

「よっしゃあ！」

「あの・・・メツカイさん、霊怪探偵って？」

「ああ、ジヨジヨの提案で始める事になった霊や妖怪専門の仕事さ」
「！」

「・・・私も手伝わせてもらえないでしょうか？」

「マジか？、助かるぜ桃子！、お前がいてくれれば安心だぜ！」

「・・・おいおい桃子、本気でこんな馬鹿の手伝いをするのか？」

「ええ、私の能力を役立てる事ができるのなら喜んで。」

「まあ、お前が決めたことなら俺は反対しないがな・・・」

「ありがとうございます、天の邪鬼さん。」

「ば、馬鹿野郎！安駄婆の命令だから仕方なく付いてやってるだけだ、そこを勘違いするんじゃないやねえぞ！」

「てるなよ、黒猫くん！」

「め、メツカイ、テメエ!!!」

「ふふ・・・」

喧嘩を始めるメツカイと天の邪鬼、桃子はそれを見て小さく笑った。

「困ったな、これじゃメツカイ君に鍵を渡せないよ・・・」

「オイ城ヶ崎！」

「あ、そう言えば君がいたねジヨジヨ君。」

「鍵は後で俺がメツカイに渡しといてやるぜ。」

「頼んだよ。」

城ヶ崎はジヨジヨに鍵を渡すと奥の方へと去って行った。

「あの、メツカイさん。」

「なんだ、桃子。」

「私、準備もあるのでそろそろ帰ります。」

「おっ、そうか・・・準備って何の？」

「ふふ、秘密です、さあ帰りましょう、天の邪鬼さん。」

「ああ、じゃああばよ、馬鹿メツカイ！」

「へっ、次にあった時は覚悟しとけ、黒猫！」

桃子達も家へ帰って行った。

「メツカイ、俺達も部屋に戻ろうぜ。」

「ああそうだな。」

メツカイ達は自分達の部屋へと向かう。

ガチャ！

「・・・ここがオレ達の部屋か。」

「なかなかいいじゃないか、時計もあるぜ！」

「もうこんな時間だったのか。」

「そりゃそうだろ、桃子が来たぐらいだぜ？」

「だな、桃子が学校サボる訳ねえしな。」

「ああ、お前と違ってな！」

「んだとテメエ！」

「落ち着けて、少し休もうぜ？」

「・・・まあ、それもそうだな、今日の所はもう休むか。」

「まっ、なにせよ此所が俺達の出発点って事だ！」

「おう、オレ達の仕事、霊怪探偵のな！！！」

こうして無事メツカイとジヨジヨは寢床と仲間を手に入れ新たな出発をするのであった・・・

第参話 霊と闇人と人間と友情と (前編) (前書き)

今回、ゲストキャラが多数登場します！

メツカイ「仕事こねえかな・・・」

第参話 霊と闇人と人間と友情と (前編)

怪堂の家

「……………」

怪堂は桃子からメツカイについての話を聞き、一人考えていた。

「琢磨さん、実は……………」

「何ですか、桃子さん？」

「メツカイさんのお祖父さん、昨日亡くなられたんです……………」

「!?、……………メツカイの……………じいさんが……………」

「……………」

桃子は無言でうなずいた。

「……………じいさんはメツカイにとって、たった一人の肉親だった……………、メツカイの奴……………」

「きつとつらかったと思います……………」

「畜生!、俺は空気も読まずメツカイに喧嘩を吹っ掛けようとしちまった……………、男として……………最悪だ!」

「琢磨さん……………」

「……………クソ!」

怪堂は頭をかきながら起き上がる。

「男として自分が許せねえ……、メツカイに謝らねえと！」

- 花咲荘 -

「……メツカイさん。」

優しい声がメツカイを
呼ぶ。

「うっん……」

「おきろ！メツカイ！」

次はムカツク声がメツカイを呼ぶ。

「……」

「メツカイさん、起きてください……遅刻しますよ。」

「ん……」

「おーい、聞こえないのか？」

「……」

「おいテメー、俺の時だけシカトしやがって、起きてんだろ……！」

「……」

「・・・分かりました、起きてくれないなら私、隣で寝ちゃいます。」

すると優しい声の人物はメツカイの横に寝ころがる。

「うわっ!?!」

メツカイは驚き起き上がる。

「おはようございます、メツカイさん。」

「・・・おはよう。」

メツカイを呼んでいた人物は桃子だった。

「・・・何で桃子がここにいるんだ?」

「メツカイさんのお手伝いをするなら、こちらに住んだ方が都合がいいと思ったので・・・それに他の部屋も空いていました・・・、それよりも早くご飯を食べてしましましょう、遅刻しちゃいます。」

「あ、ああ・・・」

メツカイは桃子に言われ朝食を食べる。

「・・・ごちそうさま、おつとやべえ遅刻しちゃっ。」

「テメーがちんたら食ってるからだぜ!」

「うるせー、マシユマロお化け!」

メツカイとジヨジヨは喧嘩を始める。

「本当に遅刻しますよ、メツカイさん。」

「わりい、行くぞジヨジヨ!」

「俺に指図すんな、馬鹿メツカイ！」

三人は急いで部屋を出る。

「おや、メツカイくん桃子さん、いつてらっしゃい。」

「おう！」

「いつてきます、城ヶ崎さん。」

花咲荘の入口で掃除をしていた城ヶ崎がメツカイと桃子に声をかけ、二人もそれに応える。

「さて、急がないとな！」

「はい。」

二人は学校まで走っていく。

- 零天高校1-C教室前 -

「メツカイのやつおせえな・・・」

怪堂は一人メツカイの教室の前で待っていた。

するとメツカイが教室の方へと歩いて行く。

「お、メツカイの奴、来た・・・かつ!？」

怪堂が目にしたのはメツカイと桃子が仲良く一緒に(脳内補正有)

登校してくる様子だった。

「ん？、おお怪堂。」

「おはようございます、琢磨さん。」

「な、な、な、メツカイ、て、てめ、てめえ……も、桃子さんと・
・仲良く……と、登校だと？」

「……どうした怪堂？」

「う、うわああー！ーッ！ー！」

怪堂は叫びながら走り去って行く。

「……どうしたのでしょうか？」

「さあな……」

二人は教室に入って行く。

・校舎裏・

「……はあ、何やってんだ俺。」

怪堂はメツカイに謝らなければならぬと言っのに桃子の事でシヨ
ックを受け逃げ出してしまった自分を悔やんでいた。

「……今度こそは！」

放課後

「……………」

怪堂は今度は校門の前でメツカイを待っていた。

するとメツカイが歩いて来る。

「……………来たか、メツカ、いつ!?!?」

怪堂の目につつたのはまたも仲良く一緒に歩いているメツカイと桃子だった。

「……………といいですね。」

「……………ん!?桃子さん、メツカイと何か話している?」

怪堂はこっそりと後をつける。

「そうだな、やっぱり仕事来ないと金に困るし……………」

「……………仕事?」

「そうですね、部屋に何も無いのも不便ですしね。」

「まあ、オレはお前がメシ作ってくれればそれで十分だけどな。」

「ふふ、メツカイさんも私にばかり頼ってはいけませんよ、いざという時困っても知りませんよ?」

「へいへい……」

「なんだ今の会話……、まさか一緒に住んでるのか!？」

「ただいま。」

「やあ、おかえりメツカイ君。」

「花咲荘……?」

「城ヶ崎の兄ちゃん、依頼人来てるかな?」

「ああ、だれか来てたから立たせてるのも何だし客間に案内しといたよ。」

「そうか、ありがとう城ヶ崎の兄ちゃん!」

二人は客間に向かう。

そして怪堂はそれをこっそりつける。

・客間・

「……で、あんたが依頼人?」

「ああ、俺はブライ、ダークハンターってのをしてる……」

「ダークハンターってあの西洋の妖怪達を狩る事を生業にする……?」

「……そんなに警戒する事は無い、別にそこにいる黒猫や白い幽霊を狩る気は無い。」

「で、依頼は?」

「実は仲間が妙な霊にとりつかれてな……それを払って欲しい。」

「ダークハンターなら自分でやればいいだろ。」

「・・・俺は相手を殺す事しか出来ない。」

男はどこか悲しげな目でそう呟く。

「・・・そうか、じゃあ引き受けたぜその仕事！」

「メツカイさん・・・」

「ありがとう・・・」

三人と二匹(?)は部屋を出る。

「・・・ダークハンター?、とりつく?、なんだってんだ?」

怪堂もメツカイ達の後をつける。

・アンティークショップ美沙里・

「戻ったぞ、ミザリイ。」

『あらブライ、お客さんをつれてきてくれたの?』

「つまらん冗談はよせ、それとお前の営業に付き合う暇は無い。」

『相変わらず無愛想ね、それであな達は・・・?』

「どうも綺麗なお姉さん、俺様はジヨジヨともうします。」

「オレは靈崎メツカイ、メツカイでいいぜ、ミザリイさん。」

「私は恋ヶ窪桃子と言います、桃子と読んでください。」

『よろしく、メツカイくん、桃子ちゃん、ジヨジヨくん、・・・それでそっちの黒猫くんは?』

「けっ、名乗る必要ねえだろ、どうせ仕事が終わればおさらばだ。」

『あら・・・それはわからないわよ?』

「・・・ちつ、天の邪鬼だ、これでいいだろ？」

「ミザリイ、彼等をガロンの所に連れて行きたい、二階に上がらせてくれ。」

『と言うことは彼等が・・・？』

「ああ、ガロンに取りついた霊を払ってくれるそうだ。」

『そう・・・ついてきて。』

メツカイ達はミザリイにつれられ二階へと上がる。

「戻ったぞ、みんな。」

「遅いわよ、ブライ！ガロンの奴暴れてるわよ！！！」

『グオオオオオツ！！！！』

「お、狼男！？」

「アタシ達だけじゃガロンを押さえつけるの大変だったヨ！」

「全くだぜブライ！俺様とレイレイちゃんのお愛でなんとかあったがよ！」

「だまれ、セクハラゾンビ！」

ギタリスト風の男はチャイニーズの女性に殴られた。

「ぐふっ！・・・ヒドイぜ、レイレイちゃん・・・」

「ザベルも大変だね・・・」

「ブライ・・・その人・・・達は？」

「ああ、ガロンを助けてくれる人達だ。」

『白髪の子がメツカイ、薄紫色の髪の子が桃子、幽霊の子がジヨジヨ、黒猫くんが天の邪鬼よ。』

「・・・私・・・エリア＝フォボス・・・種族は秘密・・・フォボスで・・・いい。」

「私はバレッタ、ダークハンターよ、依頼料は安くしといてよね？」
「オイラは火頭鬼、種族は鬼だよ。」

「アタシはシャオ＝レイレイ、で今はお札になってるけどこれがお姉ちゃんのシャオ＝リンリンだよ、一応ダークハンターかな……？」

「そして俺様がメタルの神、ザベル＝ザロック様だ！種族は不死者だ、よろしく。」

「相棒のル＝マルタデス、よろしくデス。」

「よ、よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「そしてこいつがオレの相棒……ガロンだ。」

「グオオオオツ！！！」

「……所で症状が分かりにくいんだけど。」

「ガロンが人狼なのは元々だ、問題は勝手に獣化してる事と自我を保ててない事だ。」

「精神的に不安定な状態って事か……どうしてこんな事に？」

「たまたま日本来たんだが……妖怪退治を頼まれてな……」

「妖怪は倒したんだけど、ガロンが霊にとりつかれたってわけ」

「その霊って……？」

「多分……その場所に……住んで……いた……何かの……霊。」

「

「そうk「グオオオオツ！！！」

パライイン！

ガロンはいきなりメツカイに飛びかかり窓から外に落ちていく。

「メツカイさん！？」

『ブライ・・・弁償ね?』

「・・・俺が・・・か?」

「・・・たく、誰か来たらどうするんだよ。」

『安心してメツカイくん、今は人避けの魔法が掛けられているから常人はまず来ないわ。』

「・・・そりゃどうも。」

そして怪堂はと言うと・・・

「な、なんだ!? ありゃ・・・狼男!?」

メツカイ達をつけてきていた。

第参話 霊と闇人と人間と友情と (前編) (後書き)

- 次回予告 -

「くっそお、初めての依頼だっというのに相手にするのは場数を踏んできたガロンととりついてる幽霊、一体どっちを相手すればいいんだ!？」

何!?!、桃子お前が霊のとりついた原因を調べて除霊するって・・・?、わかつたぜ桃子、オレはお前を信じる!

次回、「霊と闇人と人間と友情と(後編)」、次回も絶対見てくれよな!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2749z/>

滅 怪 伝

2011年12月17日02時49分発行